

編集室から

先月末、会津に行ってきました。和歌山県有田町の現場で一緒にいる矢部さんの古民家民宿に宿泊体験するためでした。

ところが、当日は、大雪警報が…。最寄りのICまでは順調でしたが、矢部さんの集落へ上がるにつれ、徐々に積雪量が半端でないことがわかってきました。

どうにか車を停めて、プロントガラスとワイパーを凍結防止のカバーシートで覆い、荷物を離れに運び込んで、夕食。近隣のお母さまたちの手料理を、この大雪の中、わざわざ運び込んで頂くという贅沢さ。西会津の郷土料理は、どれも味わい深く、美味しく頂戴しました。

なかでも、馬刺しは、絶品で、口の中でとろけるような食感は、忘れられません。熊本や信州も有名ですが、こんなに美味しい馬刺しは頂いたことが有りません。

地元の方々が、日常的に食して居られる食材を地元の調理法で詠えられることの意味を改めて噛み締めたご馳走でした。

その翌日。降雪量はわずかでしたが、低温と強風で、大変な事になっていました。

(は)



のと
だらぼち

本ニュースにレギュラー執筆していただいている川畠さんが「能登だらぼち」を引き受けて改装開店されました。

上京された際、ご利用になってみてください。

のと だらぼち
03-5537-3078
17:00~23:00 日曜祝休

中央区銀座8-4-27
プラーザ銀座ビル地下1階
(銀座外堀通りasics前)

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2022/03
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>
〒920-1167
石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217
Fax 076-233-7375
Email usric@neting.or.jp

弥 生



都内にて
by hama

2022/03
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>

寄稿『読めない未来にどう備える?』

サンポート高松クリニック 井垣 俊郎

三回目のブースター接種から半年も過ぎれば、また抗体価は低下するでしょう。その時にウィルスがどのような変異を遂げているか、我々がどんな状況にあるか、全く予想が付きません。カギはウィルス変異の抑制なのですが、その道筋は深い霧の中です。

◎

そしてもう少し長い目で見れば、地球温暖化が迫っています。旱魃と水害・海面上昇・生態系の変化・食糧生産への影響…、今回のCOVID-19とはケタの違うスケールで地球規模の混乱が生じると予想されます。国際会議が何度も開かれ、いまやフェイクニュースという人は居なくなりましたが、対策は遅々として進んでいません。目の前にあるCOVID-19の・景気回復・ウクライナ情勢・米中対立等に比べると、即座に痛みを感じられないぶん先送りされてしまうのでしょうか。

◎

人類の知能は、ある面では飛躍的な進歩を遂げました。太陽よりはるか遠くにある小さな星に宇宙船を送って石を採取したり、皮膚から取った細胞に操作を加えて新たな生命を作りだしたりすることも可能になりました。しかし見たくない未来に向き合い備えることは、頭では判っていてもどうも苦手なようです。その最も身近な例が老化です。

◎

生命を伸ばす技術は、日々進歩しています。手術の傷口はますます小さく体への負担も少なくなりガン細胞だけ攻撃する薬剤も作られたので、たとえガンになっても容易には死ななくなりました。かつて恐れられた心筋梗塞・脳卒中・各種の感染症も、同様です。生命は伸びていますが、老化を早める要素もまた増える一方です。体脂肪の増加・運動不足・野菜の不足・塩分の過剰・飲酒の過剰・ストレス・喫煙・睡眠不足・・・、それらの不健康な生活習慣は動脈硬化を介して臓器の老化を早めます。これら全てを薬で抑えることはできません。硬くなった血管を細いところまで全て取り替えることもできません。

◎

自分の晩年がピンピンコロリになるか病に長く悩む日々を過ごすかは、ただ生活習慣の改善にかっっています。大袈裟に思われるかもしれませんが、目の前の患者さんを通して地球環境や人類の未来を感じる、そんな事もできるのが生活習慣病の外来です。



【プロフィール】
（いがき としお）金沢大学北潟寮で、濱さんの二年後輩でした。濱さんは、とっても怖かった…。卒業後は金沢を離れ、現在は温暖な讃岐高松で又ク又クしています。

濱の起業塾 三十五『事業運③』

事業運を招き入れられる人とは、どんな人なのか、改めて思い立って、色々な方に尋ねてみた。

その中のお一方が、印象的なお話をしてくださった。曰く、運を招来するひとは、華がある、と。

この方が言う「華」とは、華美な装飾品をつけていたり、着飾ったりすることではない。その方が自らはなっている「内なる輝き」が、印象として現れているものだそうだ。

そのような方は、おそらく生き生きとしていて、活発・澁瀾・行動的といった言葉がぴったりと当てはまり、瞳はキラキラと輝いているに違いない。内に秘めた想い・志の高さ、確信の深さなどから自ずから発せられるもの。

では、人がそのような状態になれるのは、なぜだろうか。輝きの源泉は、その方に明確に見えているビジョンなのではないだろうか。人は、それを無言の内に感じて、その人に、その人のビジョンに惹かれていくのだろう。

惹かれるビジョンとは、単に「描かれている世界が素晴らしい。効果が魅力的だ。」だけではないも

のがある。長年の経験から、構想やその予想される結果は素晴らしいとしても、何故か頓挫するプロジェクトがままあることを知っている。この「事業運」シリーズも、その原因を考察することから始まっている。

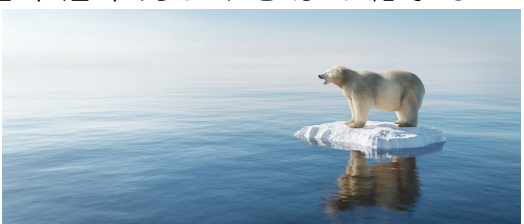
事業運に恵まれる素となる華。その華の素となる明確なビジョン。そのビジョンが魅力的でかつ、賞味期限の長いものであるためには、何が必要なのか。

「概論」⑥・⑩・⑬で度々触れた「Why」の確信性・透明感に基づくものではないだろうか。

つまり、ビジョンの根底に根付いている志の質が根本的な源泉となるのだと思っている。

そして、その志にはサイズがある。志向性の高さ×幅広さ×深さ。そして、透明度。この志のサイズが、実は結果のサイズにも影響していると感じている。

志の高さは事業の規模に、志の幅広さは地域に及ぼす影響の幅広さに、志の深さは事業の関係性の深さに、志の透明度は事業の賞味期限の長さ（普遍性）に、それぞれ対応していると考え始めている。



前号に引き続き、雇用に関連する統計データをみていきたい。

まずは、正規雇用と非正規雇用で就業者数の推移を比較する。

正規雇用においては、2020年の1年間を通じて比較的安定した水準で推移し、前年度と比べてむしろ増加している。コロナ禍においてもマイナスの影響は少なく、人手不足が顕著となった医療福祉分野等における正規雇用の増が影響したものと推測される。

非正規雇用においては、2020年4月に前月比マイナス131万人と激減した。その後も回復の足取りは重く、同年8～11月は順調に増加したものの4月の激減を埋めるには至らず、12月には再び減少に転じた。明らかに業績の悪化に伴う雇い止め等が影響しているものと思われる。

業種別の就業者数を対前年同月比でみると、コロナ禍の影響度合いがうかがえる。実数も考慮し大きなマイナスとなったのは、「宿泊、飲食サービス業」であり、緊急事態宣言以降年末まで低水準で推移している。一方で、「不動産、物品賃貸業」、「情報通信業」では年間を通じて増加傾向となっている。リモート環境等のITや在宅ワーク関連の需要が旺盛だったことをうかがわせる。

休業者数は2020年4月に突出した増加をみせ、5～7月の減少でほぼ元に戻った後、昨年をやや上回る水準で年末まで推移している。緊急事態宣言に伴う雇用調整助成金を活用した休業が、相当程度これに含まれていると思われる。

これを男女別にみると、女のほうにより多い休業者が生じている。ただし、前年の女の休業者数が男の1.5倍程度であることを勘案すると、それほど特徴的なことではないとも言える。

データを見ずして感覚的に物事を語るのは、その道の熟練者を除き、大体において不正確である。今の時代、政府統計をはじめとして、データはネット上にたくさん転がっているのだから、覗きにあって、様々な視点から比べて、仮説を検証し続けていきたいと常に思う。

一方で、データの限界を見極め、謙虚に扱い、そこに表れない姿を真摯に考えること、そして現場に入っていくことが、あわせてとても重要だと思う。

(このシリーズ、これにて終了)

このように数字を並べてみると「新型コロナが飲食業界に破滅的な危機をもたらした!!!」という文字が踊るのでしょうか。

しかしその見方は本当に正しいのでしょうか？つまりこの数字だけを本当に鵜呑みにしていいのでしょうか？

例えば

(1)倒産件数

- 2000年の倒産件数が347件であり、年度によってばらつきはあるが2019年まで前年度平均5%の廃業数が伸びてきていることを考えると一概にコロナだけが原因とは言い切れず、飲食業界の構造的な問題(後継者不在、団塊世代のリタイア、若年人口の減少による消費力低下と人手不足等々)が根底にあり廃業のトリガーとしてのコロナだったというほうが正しいのかもしれない。

よく通っていた中目黒のお店も黒字だったにも関わらず後継者がいないということで休業ではなく廃業を選択したという事例もある。

またここでの自主廃業は『倒産』ではないため数字としては出てこない。

- 2020年4月に施行された「受動喫煙防止条例」の影響も否めない。減少傾向にあるとは言え男性では3割近い喫煙者がおり、酒との親和性も高い。喫煙者にとってオアシスであった喫茶店が、このコア層の需要を減らしたとしたらどうだろうか。

元喫煙者である私としては、それはコロナの比ではないと思われる。

(2)閉店数

厚労省が出している「衛生行政報告例」にある飲食店営業施設数を見ると

2015年度→2016年度	2万店減
2016年度→2017年度	3千店減
2017年度→2018年度	7千店減
2018年度→2019年度	1万7千店減
2019年度→2020年度	2万2千店減
2020年度→2021年度	1万1千店減

と決してコロナ禍だから営業している店舗数が減ったということではない。

この数字は営業している施設数であるため、閉店した場所に新たな店が開店すれば数字は変化しない。

確かに閉店数は増えたかもしれないが、その空いた場所にテイクアウト業態などが積極的に出店しているので従来の年と大して変わらない。

それよりも、そもそも開店して二年後も残れる確率が50%以下と新陳代謝が激しい業界であるので、今年はそれが活発だったと言ってもいいのかもしれない。

前述した業界の構造的課題がコロナによってより浮彫となり、新たなカタチづくりに向けた業界転換期ととらえれば

決して悲観ばかりの見方とはならないはずなのですが。

『相模の国から ～大魔神のたび～ 』 奄美大島への旅 2021.11/3～6
茨城県 境町 参与 溝口 久

一人じゃつまらないから鹿児島県大島支庁の中間君に同行を頼んだ。彼は今年度、鹿児島本庁から転勤してきた者だから、「加計呂麻にも行ったことがない」と言う。その内に「家族も一緒に行っているか？」と言う。ガイドをお願いしたつもりが、車も小生のレンタカーで若夫婦と1歳に満たない子を連れての家族サービスの旅と相成った。地元で詳しい人ということでヒューマンネットワークマガジン「かがり火」の奄美支局長の榊さんに案内を頼んだ。ちなみに小生は南足柄金太郎支局長だ。

加計呂麻島に渡る港のある古仁屋にまずは向かう。道中にマングローブ林をカヌーで巡るツアーを主催するマングローブ茶屋なるものに寄った。やってみたかったのだが、潮時が肝心らしくこの時は適した時間ではなかった。そして何より加計呂麻島に渡るフェリーの時刻に間に合わなくてはならないので、次のお楽しみにした。港に着き榊さんをピックアップして加計呂麻島を目指した。出港までの時間に、青く透き通った海に目をやるとウミガメが泳いできたのには驚いた。

島に着くと一段と美しい海の色に目を奪われるが、よく見ると岸边には小笠諸島の海底火山の爆発より噴出された軽石が漂着している。

榊さんの案内で散在する集落を巡ることになる。

安脚場（あんきゃば）集落には、弾薬庫や金子手崎（かねこてざき）防備衛所の要塞が残っている。

その先には太平洋から大島海峡の東口まで一望できる展望台があり、雄大な景色を眺めながら、戦争の重要拠点であったことを思うと感慨深いものがある。

大島海峡は水深が深く、東西両側で外海に接続していることから、海峡内の加計呂麻島側にある薩川湾が連合艦隊の泊地として用いられていた。この泊地を防衛するために、加計呂麻島東端に軍事施設が置かれていた。もともとは1920年（大正9年）頃から旧日本陸軍が奄美大島要塞として砲台を設置していたが、1941年（昭和16年）か



ら海軍によって砲台として整備されて利用されるようになった。この際は大島海峡東端に設置した防潜網や管制機雷を遠隔操作する金子手崎防備衛所が建設されている。戦後、連合軍によって武装解除を受けたが、今でも弾薬庫や防備衛所の建物が残存している。残された鉄筋コンクリートのこの要塞はコンクリートが剥落し錆びた鉄筋が露わになっている。寝泊まりして防備にあっていたことも伺われる。

島の植物は独特だ、特にガジュマル凄い。熱帯地方に生息するクワ科の木で、幹が複雑に絡み合っていてとても神秘的な雰囲気がある。奄美大島では古くから、ガジュマルにはケンムンというイタズラ好きな妖怪が住むと言われている。集落では神宿る木として大切にされてきている。近寄りには自然道を歩くことになる。「ハブに注意」の看板は何度か見るが、すでに外気温が下がっている季節なのでそれほどナーバスにならずに済みそうだ。

この島でもサトウキビの栽培は盛んだ。まぼろしの黒糖と言われる「加計呂麻黒糖」がある。糖度の高い1～4月のサトウキビしか使わないため、生産数が少ない。精度18度以上に育てたさとうきびを400年伝統の手作りで長時間かけて仕上げる香り豊かなさとうきび100%の黒糖だ。これは迷わず購入した。

学校は廃校になっていたり、耕作放棄地も気になったが、島内の道の整備はいまだ進んでいるし植物が覆い被さってくるから道路の維持もなかなか大変だ。でもターンの人たちは確実にいる。不便さはあるに決まっているけど、それを補ってやまない魅力がこの島にはある。

榊さんは廃校活用策を熱く語ってくれた。世間に広く声掛ければ、使いたいとの反応がありそうな気がする。何年間後にまた来てみたいものだ。そろそろ、島を後にする時間になった。榊さんを島に残し本島に渡った。この日の夜は鹿児島県の大島支庁の方々が歓迎会を開いてくれると言う。コロナのせいで飲み会を開いていなかったようで、小生をダシにしたこの夜の飲み会は大いに盛り上がった。

3泊4日の奄美の旅もいよいよおしまい。また来る機会があるだろうと思いつつ奄美を後にした。

再訪は2か月経った年明け早々の1月11日に実現した。この時の内容はまた改めて。

（おしまい）

